ハンドボールにおける初心者指導についての研究

萩原　亨　（小学校課程・保健体育副専攻）

【序　論】

○研究動機・方法・目的

現在の日本では様々なスポーツが行われている。著者は高校時代からハンドボール競技に取り組んでいるが、日本におけるハンドボール競技はどうしてもマイナーという感が拭えない。ヨーロッパ、特にドイツではボールゲーム全体の理論の中のハンドボール理論という位置付けで確立されているが、日本の場合、個別理論のみが先走ってしまいボールゲームとしての位置付けや、系統的教材配列というものがあまりなされていないと思われる。本論文ではドイツでボールゲーム、特にハンドボールの分野で指導的立場にあるＨ・ケスラーの文献を拠り所とし、初心者指導における問題点を解決し、教材体系を整えようとするものである。

【本論】

○第１章　ハンドボールの特性論

この章では、ハンドボールの特性を明らかにするためにまずボールゲーム全般の概念を明らかにした。ボールゲームとは「１つのボールを互いに奪い合い、それをゴールあるいはマークの中に送り込むこと、敵陣内にあるボールを敵が返球できないようにすること、ゴールに達しないように敵を押し退けること、その種目独自のターゲットにボールを当てること」である。このようなボールゲームの概念を踏まえてハンドボールの特性を見て行くと、ハンドボールとは「手の使用によるパスやドリブルによって１人または数人で移動し、ディフェンスをかわし、６メートルの半円状の侵入制限エリアの外からゴールキーパーの守っているゴールに多くのシュートを投げ入れたチームが勝ちとなる」ゲームである。特別な予見能力や反応能力などが必要である反面、複雑な動きを問わなければ年齢や男女を問わずに容易にゲームに入り込むことができると思われる。

○第２章　ハンドボールにおけるゲーム教材と運動教材

この章では、ハンドボールにおけるゲーム教材と運動教材、さらにその教材内容を検討した。ゲーム教材とは僅かな条件によってゲーム理念が実現できるようなゲームの教材であり、運動教材とはゲーム場面において必要な技術を習得する、運動の教材である。ただしこの運動教材は、ゲーム教材や「正規のボールゲーム」を行うための前提条件として存在するのではない。

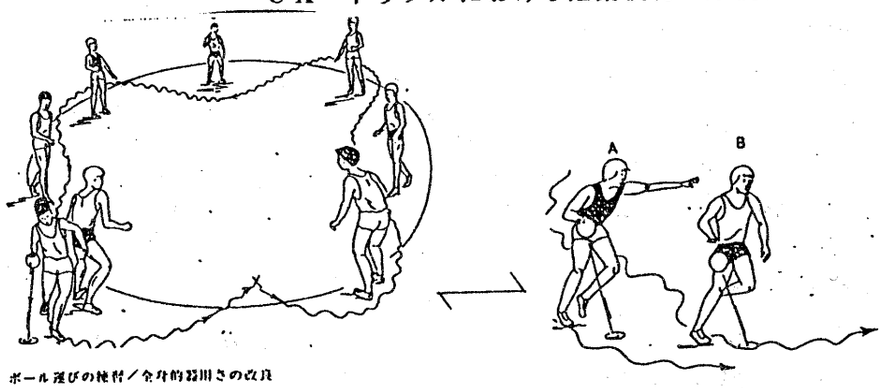
○第３章　ゲーム教材と運動教材の関わり

この章では、ゲーム教材と運動教材の関係について検討した。両者はそれぞれ独立して考えられるのではなく、互いに平行な関係、相互補完的な関係として認識されるものである。さらにゲーム教材には「リードアップゲーム」、「リードアップボールゲーム」があるが、これらと「正規のボールゲーム」を含めた三者の関係は、正規のゲームとの技術的、戦術的類縁性、ゲーム理念などが保たれたまま、螺旋構造をなして段階的に配列されているということができる。

【結論】

ハンドボールの初心者指導の研究ということで論を進めてきたが、より適切で段階的な指導には、教材の系統的配列がなされなければならないということが理解できた。教材の系統的配列とは、生徒や部員の技術レベルや発達段階を踏まえて効率的に学べるように教材を配列していくことである。さらにゲーム教材や運動教材は、それぞれ独立して学ばれるのではなく、相互補完的関係を保って学習されるべきものである。今後の課題は本論文で研究したことを実践していくことである。

ｅｘ　ドリブルにおける運動教材の系統的配列



―― 引用、参考文献　省略 ――